極道聖女　召喚された異世界でヤクザは聖者の溺愛に囚われる

登場人物紹介

【1】極道召喚！

死んだら異世界で聖女様と呼ばれていた。
――なんだそりゃ？　って、自分でもそう思うぜ。
叶（かのう）ジョウ、三十五歳。
職業は極道。
死因は――不明。
なんで不明かって？　覚えてねぇんだよ。
たぶん鉄砲玉かなんかに刺されて殺されたんだろう。
真っ白なオーダーメイドのスーツが真っ赤に染まった光景だけは覚えている。
なのに胸に空いた傷は、気づけば綺麗さっぱり消えていた。
そして今、ジョウは丸いドーム型の高い天井の下、ゲームで見るような城か神殿のような石造りの広間の中心に立っていた。壁には、何か文字が刻まれている。
香のような甘い匂いを感じて、ジョウはすんと鼻を鳴らした。
周囲には、頭に布を巻き、裾の長い衣をまとった男達がずらりと並び、ジョウを囲んでいる。

「召喚に成功したぞ！」
「聖女様……なのか？」
「預言どおり、漆黒の髪に瞳の、女性のようにお美しい方でらっしゃる」
死んだと思ったが、気を失って拉致されたのか？
自らを囲む連中がどこの組かも分からないうえに、状況も分からない。
ただ、彼らの声の中に禁句を聞いて、ジョウは眉をぴくりと跳ねさせた。
「……なんだ？　俺が女顔だって言いてぇのか？」
漆黒の長いまつげに縁どられた切れ長の目がギロリと光る。
その視線に、周囲は恐れおののいた様子ながらも頬を染める。
ジョウは内心で舌打ちをした。
――いつもの反応だ。だから余計に気にくわねぇ。
女顔だの美形だの言われるたびに、いつも苛立ってきた。
極道に必要なのは『お綺麗な顔』じゃねぇっていうの！
ああ、出来るなら俺だって、誰もが頬を染めるんじゃなくて、誰もが青ざめる顔を手に入れたかったよ！
ジョウはそう思いながら、ボタンが弾け飛ぶのも気にせず、シャツの前を勢いよく引きちぎる。
そして血染めの上着ごと脱ぎ捨てた。
「てめぇら、どこの組のモンだ？　この仏花の観音を拝んでおいて、俺が誰か分からねぇなんて言わせねぇぜ！」
艶やかな黒髪を片側に払う。
筋肉の隆起が分かる首筋は男そのものだが、雪のように白い肌が際立つ。数人の男がごくりと唾を呑む音を聞いて、ジョウは鼻で笑った。
――どこにでもヘンタイはいるもんだ。
それより背中を見ろ、と言いたい。
白百合に囲まれた微笑む観音の刺青。唯一無二の彫り物だ。
もともと頼んだのは昇り竜だったのに、出来上がり、合わせ鏡で見せられたのはこれだった。
当然ジョウは激怒した。
だが彫り師の親父が、キセルをくゆらせてこう言った。
『てめぇの肌が、花に囲まれた観音様ぁ彫れって言ってたんだよ』
満足げなその顔に、怒る気も失せて苦笑いした。
以来、この背中はジョウと生き死にを共にする相棒だ。
同時に、他の野郎どもには恐怖の象徴でもあった。
観音の微笑みとは真逆、ジョウの形の良い唇が悪辣に歪む時――「そいつはもう死んでる」と噂された。
白百合は供養の花。
ついた二つ名は『仏花のジョウ』。

しかし、背中の彫り物を見た連中の反応は、予想を斜めに突き抜けた。
「おお、白百合のお印！」
「さらには女神オルテナのお姿まで、そっくりそのまま背中にいらっしゃるとは！」
「まさしく、あなたは聖女様！」
観音様を両手を組んで拝み、一斉に床にひれ伏したのだ。
予想外の対応に、ジョウは歯噛みしつつ周囲を睨む。
「聖女、聖女ってさっきからなんだよ！　俺は男だ！」
「ですが、あなたは聖女様にございます」
長衣の列の先頭にいた糸目の男が、ジョウの背後を指さした。
振り返ると、そこには背中の刺青とそっくりの金色の観音像が微笑みながらこちらを見下ろしていた。その後ろに真っ赤な炎を背負った仁王のような彫像もあるが、それではないようだ。
ぽかんと口を開けたまま観音像を見上げるジョウに、糸目の男が言葉を続ける。
「あちらは女神オルテナ様の像にございます。そのお印があるあなたこそ、まさしく聖女様」
「だから、男の俺が聖女ってわけ分かんねぇぞ！　ちゃんと説明しろ！」
ジョウの恫喝に、糸目の男はしらりと即答した。
「その暇はございません」
「はぁ!?」
「とにかく時間がありません。一刻も早く聖者様のもとへ。行かれれば、お分かりになります」

そう言って糸目の男が何事かを唱えた瞬間、ジョウの足下がふわりと光る。
そこに丸い魔法陣のような紋様が浮かぶのと同時に、ジョウの視界はぐわりと歪んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

次に立っていたのは、神殿ではなく荒野だった。
赤茶けた大地、乾いた風。
「なんなんだよ！　まったく！」
ジョウは叫び、革靴で地面を蹴り上げた。
くるくる変わる状況に、頭がついていかない。
そこへ、ぬうっと影が差す。
見上げると、空を覆うような巨大な黒い塊。
化け物だった。
目も鼻もなく、ただの黒い塊。それが裂けるように開いていく。並んでいるのは尖った歯の山だ。
ならばあれは口なのか。あんなものでばくりとやられたら、どこをやられたとしても即死だ。
ジョウは懐に手を入れようとして、舌打ちした。
銃がない。服もない。武器を入れていたはずの上着はさっき脱ぎ捨てていた。
『兄貴は完璧すぎて、ちょっと抜けたところがありますからねぇ』

そんな舎弟の声が脳裏で響く。
完璧でマヌケって、どういう褒め言葉だよ。
影が近付く。空気そのものが腐るような嫌な気配。
人も獣も、触れれば魂まで喰われるだろうとなぜか分かってしまう。
そんな化け物の口がジョウの頭の上に迫り、ギザギザの牙が光る。
――やられる！
そう思った瞬間。
太陽を背にした影が飛び込んできて、化け物の頭に突き刺さる。
ギェエエェェエエエエッ!!
耳をつんざく断末魔。
ジョウは思わず眉をひそめながらも、敵から目を逸らさなかった。
数え切れない荒事で学んだことだ。相手から目を離すな。逸らせば、負けだ。
黒い化け物は煙のように崩れ、風に消えた。
そして何もなくなった地面に一本の黒い棒が転がる。刃はない。
こんな棒であの怪物を仕留めたのか。――ゾクリとした。
やがて、長身の男が砂煙の中に降り立つ。
ジョウは油断せず、その男を見つめた。男は黒い布を被っている。
風に煽られたその布が舞い上がり、銀とも白ともつかぬ髪が露わになる。

赤銅色の肌、太く長い首、鋭い目つき。
その瞳は、深く濃い赤色で、琥珀を溶かしたように光っていた。
百八十センチメートルほどの身長であるジョウよりも背が高い。百九十はあるか？
正統派の美形ではない。野性的な雄の匂いがした。
――イイ男だ。だからこそ気にくわねぇ。
そんなふうに自分が思ったことに、ジョウは思わず舌打ちした。
男が一歩、また一歩と近づく。
長い腕が伸び、ジョウの体を引き寄せた。
そして、その肉感的な唇でジョウの薄い唇に――触れた。
「なにをしやがる、このヘンタイ！」
ジョウの拳が反射的に飛ぶ。
次の瞬間、鈍い音が響いて男が離れる。
そして、唇にまだ残る感触――熱い唇の記憶。
それが、いまだ己のなかにざらざらと残っている。
いきなり触れられた怒りだけでなく、妙に胸がざわめいていた。

【2】ケダモノのキス

男はジョウのこぶしを受けて二、三歩、後方へとよろめいて――踏みとどまった。それだけでジョウは身構える。とっさのことで全力ではなかったとはいえ、自分の拳を受けて立っている奴がいるとは思わなかったのだ。

もっとも、あんなバケモンを倒した男だ。相当に強いのだろう。

そこまで考えて、別の疑問が生まれた。

――それにしても、ここはいったいどこだ？

さっきまでは神殿か城のような場所にいた。石造りの広間、ただよう香の匂い。壁一面に、見たこともない文様が刻まれていた。

それが一転して今は荒野のまっただ中にいる。

どうやら本当に異世界ってやつらしい、とジョウは顎に手を当て考える。

そういえば、あの糸目が言っていた。

「聖者のもとへ向かえ」と。

じゃあ、こいつがその聖者なのか？

会っていきなりチュウかますヘンタイが？　ない、ない！　と即座に否定する。

聖者ってのは、こう……ありがたい光を放つとか、病（やまい）を癒すとか、そういう存在じゃないのか？

それがいきなり唇を奪ってくるとか、世も末だ。

いや、ここが本当に世の果てなのかもしれないけども。

ジョウが考えているうちに、男がじりじりとこちらに寄ってくる。男が手を伸ばしたのを、とっさに払おうとしたが、逆に手首を掴まれかけた。

それはまずいと、ジョウは男の指の間に自分の指を割り込ませ、ぎゅっと握りしめる。

もう片方の手も同じように組み合い、力比べとなる。

まるでレスリングの対戦のようになってジョウは男を睨みつけた。

初めは対抗できていたが、相手のほうが背丈もガタイもいい分、力が強い。

どうしたって持久戦となれば、こっちが圧し負ける。

じり貧になる前にと足払いをかけるが、それは寸前で避けられた。

逆に体勢を崩した腰を引き寄せられ、ギラギラした赤の瞳が焦点が合わないほどジョウに近づいてくる。

このヘンタイ、野郎にそんなにチュウしたいのか!?

だが――断る！

とばかりに、腹に膝蹴りを決めてやった。

さすがの相手もぐっと息を詰めた。腕の力が弱まるのを見計らって、ジョウは男を突き飛ばす。

しかし、みぞおちにしっかり入ったはずなのに、男は両足を踏ん張り立っていた。

膝に当たった固い感触で、しっかり腹筋を締めて防御されたことを察した。
相当鍛えている。戦うために造られた身体だと、幾多の修羅場をくぐり抜けてきたカンが告げる。
ジョウは距離を保ちながら、拳や蹴りを繰り出した。
だが、そのことごとくをすれすれで避けられ、舌打ちする。
相手は隙を見てはこっちを拘束しようとする。そのたびにジョウはこの野獣の顎に頭突きを食らわせ、足の甲を思いきり踏んでやった。
そのたびに男は一度引き下がるが、懲りずにまた手を伸ばしてくる。その繰り返しだ。
そこで、ジョウは奇妙なことに気付いた。
こっちから攻撃しても、男は一度も反撃してこない。
ただ、抱きしめようとするばかりだ。
いや、チューしようとするヘンタイなんだから、それも攻撃のうちか？
それでも、奴の動きにはどこかためらいがあった。
まるで、こちらを傷つけることを恐れているようだ。
その様は、動物番組で見た――威嚇する雌に、根気強く求愛を続ける猛獣の雄のようだった。
ギラギラと雄の欲望も露わなその眼差しの奥に、ふと、救いを求めるような懇願の色が見えた気がした。
――それはまるで、深い祈りのような。
拳を交えながらも、ジョウの胸にも怒りだけでない、たとえようもないざわめきが広がる。

だから――油断したのか、それとも根負けしたのか。
ジョウが自分でもいささか甘いと思う、拳を繰り出した瞬間。
男はジョウの拳が頬にめり込むのも気にせず、がっしりとジョウを抱きしめ、そして唇を重ねた。
……さらには、するりと舌が入りこんできた。
とっさに噛みついてやろうかと思ったが、そうは出来なかった。
野郎のキスなんて気持ち悪いはずなのに、嫌悪感がない。
ぶっとい腕にがっちり拘束されるように抱きしめられ、筋肉同士がぶつかり合う。
その温度は、血の熱を思い出させた。
戦場で感じた命の匂いに似ている。
けれど、それだけじゃない。まるで、何かを繋ぎ止めるための祈りみたいな抱擁だった。
女みたいに柔らかくもないのに、妙にぴったりと、一つに馴染む感触があった。
口のなかでぴちゃりと舌が動き、ぞくぞくと背に震えが走る。
おいおい、野郎で感じちゃうとか……悔しい。
悔しいけど――感じちゃう！
……冗談じゃねぇ！
ジョウは負けず嫌いの炎を目に灯すと、負けじと舌を絡め、挑むよう舌先に軽く噛みつく。
それが良かったのか悪かったのか。
がっぷり唇を合わせたまま、男は赤い目をかっ広げたままジョウを凝視していた。

ジョウもまた、薄目を開けてその瞳を見返した。
距離ゼロにある赤。吸い込まれそうなほど、熱く、痛いほどに澄んだ光。
間近で見た瞳の色は、長い年月を経て熟成した洋酒のようにとろりと深い。
赤くて、熱くて、痛いほどに澄んでいた。
赤い瞳と、ジョウの漆黒の瞳が、互いにぼやけた視点でただ見つめあう。
その瞬間、自分を抱くこの腕が守るための腕であることを、ジョウはなぜか直感してしまった。
裸の背に回った男の手は、がっしりとジョウを拘束したまま離れない。
そのくせ、小刻みに震えて、なにかに耐えているようだった。
――ジョウが望まなければ、それ以上は触れない。進まないとでも言うように。
野郎の口をチュウチュウ吸っておいて……キスだけの清純派か？
胸の奥で、苦笑と一緒に小さな熱が芽吹いた。
それは、確かに温かいものだった。
内心でジョウは苦笑し、男のがっしりした首に腕を回したのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それからしばらくして、ジョウはいまだ荒野にいた。
投げ出した足には、白い頭が乗っかって高いびきをかいている。

先程ジョウに抱き着いてきたあの男は、散々チュウチュウタコみたいに、人の唇を吸っていたかと思ったら、ずるずるジョウにもたれ掛かってきたのだ。
気を失ったというより――寝た。
揺さぶっても、頬をぺしぺし叩いても起きようとしない。もたれ掛かられてデカいガタイを支え続けるのも辛いので、ジョウはそのまま地面に男の身体を横たえて、自分も座った。
なんで膝枕って？　奴のほうがジョウの膝にすり寄ってきたのだ。「重い」と頭をひっぱたいてやっても離れりゃしねえ。本当はこいつたぬき寝入りしてねぇか？　と思ったが。
荒野の風は乾いていた。
空には鈍い灰色の雲が広がり、地平の向こうで黒い靄がうごめいている。
それは男と出会う直前に襲ってきたあの化け物を連想させ、ジョウは目を細めた。
こんな世界で「聖者」だの「聖女」だの言っても、きっと命がいくつあっても足りないが――まあ、元居たシャバと変わんねぇか。
そう思いつつ、ジョウもまどろもうとした時だった。
二人の居る近くの地面が光ったと同時に、長いずるずるとした布をまとった男達が次々と現れる。
そして――目の前で全員がひれ伏した。
ジョウは身構えかけた身体を抑え、怒りを腹に戻すように息を吐き出す。
「今度こそ、この状況を説明してもらえるんだろうな？」
ドスの利いた声で訊ねれば「はい」と土下座をする集団の一番前にいた糸目の男が顔を上げる。

他の奴が青ざめて震えているなかで、こいつだけがなかなかの度胸だ。
「私の名はスイン。大神殿にて神官長を務めております」
糸目の男、もといスインが言うには、ジョウの膝で寝ているのがたしかに聖者様なんだそうだ。そして、自分はその対となる聖女としてこの世界に呼ばれたという。
ジョウは顔を顰めた。
「あのな、こっちの意思の確認もなく引っ張りこんだのは、『喚ぶ』じゃなくて誘拐とか拉致って言うんだぜ？」
まあ、おかげで死んだのに生き返ったんだから感謝すべきなのだろうか。そもそもヤクザの自分が相手の同意を得て云々なんて正論説いているのが滑稽ではあるが。
ジョウの言葉に、スインがまた頭を下げる。
「そこは申し訳なく思っております。なにぶん、緊急事態でしたので」
「それでなにも分からない俺をこのケダモノの前に放り出したと？」
ジョウは自分の膝でぐうぐう寝てる男のデコをぴたんと叩いてやった。男は「ふがっ！」なんて間抜けな声を出す。スインの後ろにいる長いズルズルをきた野郎どもが「聖者様に……」なんてざわりとしたが、なにが聖者だ。
こいつは清らか……でもねぇが、とにかく、野郎の唇をチュウチュウ吸ったヘンタイだぞ！
ふん、と鼻を鳴らし、ジョウはスインに視線を動かす。
「で？　聖者と聖女ってなんなんだよ？」

するとスインは即答した。
「聖者様はこの世界を脅かす、蝕を祓うことが出来る唯一のお方にございます」
蝕――その言葉を聞いて、ジョウはさっきの黒い靄を思い出した。
魂ごと食われてしまうとなぜか分かったことを思い出し、ジョウは頷いた。
あれはただの化け物ではない。
「聖女様の役割は、戦いで蝕の穢れを受けて荒神と化した聖者様を、お鎮めすることでございます」
「鎮める？　呪いでも唱えるのか？」
だったら緊急事態とはいえ、先にその呪いの文言を教えて放り出してほしかった。おかげでこっちは唇が腫れるほど、野郎にチュウチュウ（以下略）。
そう思いつつ、ジョウが眉根を寄せると、スインは首を横に振った。
「いえ、どんな聖魔法の使い手であっても荒神と化した聖者様を鎮められません。それが出来るのは聖女様のみ」
「だからどうするんだよ？」
「ですから、聖女様のそのお身体で聖者様の昂ぶりをお鎮めに……その、あの」
それまでハキハキと受け答えをしていたスインが、急に言いにくそうにもじもじと言葉を濁した。
身体で。
昂ぶりを。

鎮める？
ひどく嫌な予感がした。
もともとカンは鋭いほうだ。いや、鋭くなきゃ極道で生き抜いてはいけねぇ。
「つまりセックスするってことか？」
「セックス？」
スインが首を傾げる。この世界じゃ通用しねぇか、とジョウは言い直す。
「だから、まぐわうとか性交するとか、ヤるって言えばいいのか？」
「そ、そのようにあけすけな……」
スインが狼狽える。後ろにいる野郎どもなどは「わわわ……」と声をあげている。見ちゃいけないものを見たとばかりに両手で顔をおおう者や耳まで真っ赤になる奴までいて、ジョウは内心できれた。
――お前ら全員童貞か？
スインがおそるおそるとばかり訊く。
「それで聖女様は聖者様を浄化なされたのでしょうか？」
「俺は男だぞ。男同士でどうやってヤるんだ？」
ニヤリと意地悪に口許をゆがめてジョウは逆に訊ねた。スインはしばし考える。
「男性とはいえ聖女様。そこは神々の起こされる奇跡の御業によって、聖者様をお鎮めになられたのではないか？ ――と」

「奇跡もクソもあるか。男も女もヤることなんて一つしかねぇだろう！ 男なら尻の穴にぶっとい棒突っ込まれるようなもんだ！ すんげー痛いぞ！ 処女同様の流血の大惨事だ！」
本気で奇跡が起こると信じこんでいるのか、大真面目に答えたスインに真実を告げてやった。後ろのほうでは「し、尻の穴」「ぼ、棒……」と泡吹いている奴がいる。
――だからお前ら全員童貞……（以下略）
「では聖女様はその苦行をなされたのですか？」
「だれが野郎にケツなんか貸すか！」
ジョウは即答した。だいたい苦行ってなんだ⁉
後ろの野郎どもみたいに泡も吹かずに、真面目にそんな質問をするこのスインは、やはり根性？がある。しかし、その方向が妙にずれていて、調子が狂う。
「俺はこの野郎にぎゅうぎゅう抱きしめられて、唇をちゅうちゅう吸われただけだ！ そしたら、こいつがこんな風に爆睡したんだ！」
ジョウは、また自分の膝で寝る男のデコをぺしんとひっぱたいた。
「ふご……」とまた間抜けな声を男が出す。
スインの後ろの奴らがまたざわめいた。
「抱擁と接吻をなされただけだと？」
「それだけで荒神と化した聖者様を鎮めるなど……」
「歴代の聖女様の中では、一番のお力の持ち主ではないか？」

今度はキラキラと尊敬の眼差しをジョウに向けている。
尊敬される筋合いなんてない。
なんなんだこいつらは、とジョウは息を吐いた。同時にいまだ眠りこけている男に視線を落とした。
けれど、もしもこいつが『聖者』なら、あの時の赤い目には確かに獣の……いや、荒神なのか？狂気が宿っていた。それが、キスなんかで我に返るってんなら、どんな命懸けの儀式よりよっぽど、神聖というべきか純情というべきか。
そう思うと、少しだけ照れくさいような気がしたのだ。
その時だ。
「唇を合わせただけではない」
男が、むくりとジョウの膝から上体を起こした。
「舌もしっかりと絡めたし、私が抱きしめるばかりではなく、最後には聖女が我が首に腕を回してくれた」
「ペロチュウしましたなんて、恥ずかしい報告するな！」
白い頭をジョウは反射的にひっぱたいた。ペロチュウ以上に恥ずかしいのは、自分がこいつの首に腕を回しましたなんて、暴露されたことだった。

【3】おジョウ様と呼ばないで！

さて、ようやく起きた男――聖者様の名はシグアンと言った。歳は二十三だという。
若造じゃねぇか？　と思ったし、てっきりもっと歳を食っているかと思った。老けて見えるという意味ではなく、妙に肝の据わったふてぶてしい面構えだったからだ。獰猛な虎みたいな面だ。
まあ年齢不詳はジョウも逆の意味で一緒だ。三十を過ぎても、年齢不詳。
若造と馬鹿にしてくるモノ知らずをぶっ飛ばしたことは一度や二度ではない。
そんな自己紹介を交わしつつ、神殿までは、荒野に飛ばされたのと同様、一瞬で戻った。
転移だとスインは答えた。
なるほど魔法というやつか。さすが異世界。
それから、上半身裸のままだったジョウは、とりあえずお召し替えをと小部屋に案内された。
そこで世話係だという利発そうな少年、エフィが待っていた。神官見習いで、今回小姓の役を務めるという。
ちなみにスイン以下ぞろぞろいた野郎どもも、みんなこの建物――大神殿に所属する神官だそうだ。
エフィは裸のジョウの背中側に回ると、両手を組んで刺青を拝み、白い衣をかけた。
ジョウはされるがままになりながら、着せられた衣に触れた。手触りが絹のようで、驚くほど軽い。見た目は単なる布なのに、どこか温もりがある。生地の間を光が通るような、不思議な輝きが

あった。
形は、神官達が着ていた裾の長い衣と同じで、着物やガウンのように前で合わせている。袖口はゆったりとした筒状をしていて、それにゆったりとしたパンツの下にはくのが主流のようだ。
足元はサンダル。
「聖女様の衣は、蝕の瘴気を祓う聖布でございます」とエフィが説明した。
なるほど、ただの衣じゃないってわけか。どうりで肌にまとわりつく感じがない。
ただ彼らの衣が青や赤などの色つきに対し、ジョウに渡されたのはまっ白な布地だ。衿元や裾に青銀の糸できらびやかな刺繍が施されていた。これが聖女様とやらの衣だという。それから端に銀のフリンジがついた青い帯を腰に巻かれ、左横でリボン結びにされた。
――おいおい、極道にリボンってなんの罰ゲームだよ。
だが、エフィが真剣な顔で「神の印です」と言うから、突っ込む気も失せた。
そもそも、羽織袴の和装などは年かさの組のモンに着付けてもらうのが当たり前になっていたから、世話されるのには慣れている。
長い黒髪は、左肩に流すようにして銀の紐で結ばれた。
それから「甘い物はお好きですか？」と聞かれ「ああ」と答えた。「お腹は空いておられますか？」と聞かれて「軽くな」と返す。
エフィは頷くと、再び胸の前で両手を組んで微笑んだ。
「では、サロンにはお茶とお菓子の他に軽食もご用意するように伝えます」

「サロン？」
「はい、そちらにて聖者様と、スイン様がお待ちにございます」
着替えた小部屋から、エフィにサロンへと案内された。あとで知ったが、小部屋は着替えるための専用の仕度部屋だったようだ。
小部屋からしてそうだったが、サロンも五つ星ホテルのような豪奢な内装だった。それもオリエンタルな雰囲気の。
ソファーに低いテーブルの調度は西洋方式だが、その素材はラタンで、竜や牡丹の東方風の細かい彫刻がされている。
置かれたクッションには、アジアンチックな唐草の柄刺繍が施されている。壁の隅には縁に金箔がほどこされた藍色や柿色の彩色も鮮やかな飾り壺がドンと置かれていた。
――あれが古伊万里だとしたら幾らするやら。
大理石だろう床には、組の応接間にも敷かれていたペルシア絨緞。この世界にペルシアって国はないだろうが、とにかく手織りで何年もかかる最高級の、お高い代物であることは分かった。
既にシグアンとスインの座っているソファーの向かいに座り、ジョウは苦笑する。
まるで、お貴族様の館だ。聖者とか聖女というから、生活するのは寺のような修行場だろうと想像していたが、ずいぶんと優雅なお暮らしのようだ。
それを聖職者なのに俗物だ――とは思わない。権威というのは、上になれば上になるほど、笑っちゃうぐらいのこけおどしの装飾が必要だと分かっている。

ほら、偉い坊さんほどキンキラの袈裟衣を着ているだろう？　王様が頭に乗っけてる王冠に意味はあるのか？　って考えると頭の飾り以外の意味なんて実はないんじゃないか？　って話になるように。

これが一般庶民なら落ち着かない気分にもなるだろうが――

ジョウは堂々と長椅子の真ん中に足を組んで腰掛けた。生まれた頃から組一つ背負った極道の息子だ。金をかけた派手な調度には慣れている。

紫檀のテーブルには、見慣れた三段重ねの銀器が出された。

いわゆるアフタヌーンティセットだ。

極道がヌーンティ楽しんじゃいけねぇか？　こちとら、酒もいけるが甘いのもいけるんだ。

調度からしてエスニックな料理が出てくるか？　と思ったが、こちらは正当派の英国風だった。

東洋と西洋。まぜこぜだなと思ったが、好物は好物だ。ありがたく戴くことにする。

サンドイッチのローストビーフはしっとりとしてうまかった。ハムとチーズを重ねて頭にプチトマトが刺されたピンチョス。キッシュはナスとトマトのこういうのでいいんだという定番で、どれも一流ホテルに負けない味わいだ。

ならばこっちはどうだ？　と中段のスコーンを手にとる。ぱかりと割って、クロテッドクリームとマーマレードをたっぷりと載せて一口。

クリームのコクとマーマレードの甘みと同時に、オレンジピールのかすかな苦みと香りが広がる。

これぞ大人のマーマレードという味だ。スコーンも口の中でホロホロと崩れる感じがまさしく

絶品。

ミルクティを一口飲み、こちらもうまいとしみじみしていたら、視線を感じた。

シグアンとスインがじっとこちらを見ている。

「腹は満ちたか？」

シグアンが訊ねる。

――あの時の赤い目も、今は穏やかだ。

荒野の獣みたいだったのに、こうして見るとただの青年の顔をしている。

そのギャップに、ジョウは少しだけおかしくなった。

「あんたのほうこそどうなんだよ？」

「満足だ」

頷くシグアンの前の銀皿は既に空だ。

さっきまであった山盛りのサンドイッチが、瞬く間に消えちまったんだからそうだろう。

しかも、さらにお代わりが出てきて、それにも手を伸ばしている。

シグアンは大きな一口で、お代わりのサンドイッチを呑み込んで再び言った。

「お前の名は？」

いきなりお前呼びか。

一瞬ムッとしたが、自分が名乗っていないことに気付き、口を開く。

「ジョウだ」

この世界で姓を名乗る必要はないだろう、と端的に呟く。
シグアンが頷いた。
「おジョウか」
そのとたん、ジョウは、イチゴショートのてっぺんにブッ刺そうとしていた銀のフォークをシグアンの眉間に向かって投げた。大口を開け、次は肉汁たっぷりのステーキサンドを食おうとしていた男は、顔の真正面でフォークをひょいと片手で受けとめる。
給仕は、ぎょっとしながらもジョウに新しい銀のフォークを差し出した。
それを受け取り、舌打ちしながら、てっぺんのイチゴに今度こそブッ刺した。
「その、おジョウ様落ち着いて」
スインがなだめるように言うが、その言葉は禁句だとばかりに、と睨みつけてやった。
銀のフォークをその細目にぶん投げなかったのは、その先につやつや大粒のイチゴちゃんが刺さっていたからだ。
口にほうりこんだイチゴもこれまた絶品だった。わけの分からん世界に放り込まれたが、とりあえず食事には困らなそうだ。
「なんで『お』付きなんだよ！」
「愛称だ。おジョウ」
「なんで、テメェにニックネームで呼ばれなきゃなんねぇんだよ！」
「私のことはシグと呼べ」

「人の話聞いてんのかよ！」
この男――真面目なんだかふざけてんのか？　いや天然か。
荒野で拳を交えた時には想像もできなかった空気を感じつつ、ジョウはショートケーキの生地にフォークを入れた。それを口に放り込んで、ピシリと固まる。
「い、いかがなされましたか？」
スインが恐る恐る聞く。
「こ、こいつは、あの伝説の……」
「伝説の？」
「ニューオ○タニのスーパーショートケーキシリーズと同じ味じゃねぇか！」
ジョウは感激のあまり叫んでしまった。
この世界にあれと同じ味があるなんて！
週に一度は若いモンに買いに行かせていた愛しのスイーツだ。
『おジョウ』様と呼ばれたことは、やはりこっちもそっくり同じ味のエ○メのマカロンに夢中になってるうちに、ごまかされてしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

白百合のおジョウ様。

それは、忌まわしくも呪わしい、ジョウの裏の二つ名だ。
もちろん、目の前で言おうもんなら、そいつの腐った口は永遠に開けないようにしてやったが、一人だけ呼び続けた奴がいた。
『おジョウ』
『だから〝お〟を付けて呼ぶな！』
最期の時もそんな会話を交わした。
最期？
最期ってなんだっけ？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ふがぁ……」
目を覚ますと見知らぬ天井ならぬ、天蓋。
そうだ。自分は死んで、生き返って異世界に呼ばれて、聖女とやらで、今、見上げているのは大神殿の聖女の寝室。そのぴらぴらレースの薔薇色アラベスク模様の天蓋だ。
瞬時に状況把握を終える。
常に生き死にと隣り合わせの極道家業で、寝ぼけている時間などない。
ジョウが身を起こせば、ふりふりのカーテンが開いて世話係の少年エフィが顔を覗かせた。

「おはようございます」
「ん、おはよう」
挨拶には挨拶で返す。それが基本だ。
最近の半グレあがりのスマホばっかり覗いている新人の舎弟は、これが出来ない奴ばかりだ。挨拶出来ない半端もんは、腹に一発蹴りをいれれば、すぐに躾は完了するが。
朝はおはよう。
昼はこんにちは。
夜はこんばんは。
基本だろう？
敵対する組の奴らと出くわした時だって、ジョウは片手を上げて「よお！」とまず挨拶。
次の瞬間には相手の顔面にそのまま拳を叩き込む。
「朝のお仕度をいたしますね」
エフィはいったん寝台を離れて、次に銀のたらいを載せたワゴンと腕にタオルを掛けて持ってきた。
顔を洗えということのようだ。御貴族様の映画でこんな光景を観たなと思いつつ、湯で洗顔し、差し出される柔らかなタオルで顔をぬぐった。
「ご朝食はこちらに運びますか？　それとも朝の食堂でとられますか？」
「ん、食堂に行く」

朝の食堂ってなんだ？　と思ったら、この聖者宮には朝用と昼用と夕餉用の食堂があるんだそうだ。
うちの組のデカい日本庭園がある本宅だって、食堂は一つだったぞ。分ける必要あんのか？　と思いつつ移動する。
聖者宮――その名のとおり、聖者と聖女が暮らす建物。だが、聖と名がつくわりに、人の手のぬくもりや生活の匂いがあって、意外と俗っぽい。そういうところが、温かくて嫌いではない。
あのいきなりチューしてきたケダモノ聖者と、一つ屋根の下ってのは、気に入らないが。
そうして移動した白を基調とする食堂には、スインとシグアンがいた。
朝から嫌な顔を見たと思ったが、東の壁面に大きく窓を取った白い朝日が照らし出す、テーブルに並べられた食事に目を瞠(みは)る。
ホカホカの銀シャリに同じく湯気の立つみそ汁。皮もパリッとしてそうな焼き目のシャケ。逆に焦げ目一つなく、優しい黄色のだし巻き卵の横にはちょこんと添えられた大根おろし。
「和食じゃねぇか⁉」
昨日のケーキも感激だったが、ここで、ＴＨＥ日本の朝ご飯が食べられると思わなかった。
すると、スインが問いかける。
「おや、聖女様のお国にはヒィンモトのお食事がおありで？」
ヒィンモトというのは東西に分かれた大陸のさらに東にある島国の名だそうだ。
「初代の聖者様がヒィンモトの料理を好まれたそうで、それから聖者宮の朝食はこちらとなっております」
「ふ～ん」
ヒィンモトという国は、日本と同じような文化の国なのかもしれない。少なくとも食事に関しては。
初代聖者がそれを好んだということは、そこの国の人間だったのか？
ジョウはそんなことを思いつつ、そっと箸をとる。
未だ夢じゃないか？　と思っていたが、懐かしい和食の鼻をくすぐる匂いが今見ている景色はリアルだと教えてくれる。
確かに朝は米の飯に限る。たまにはパンもいいけどな。どうにも腹にたまらない。
そりゃ、朝までどんちゃん騒ぎして、昼近くに起きた日にはパンケーキか、フレンチトーストのブランチなんてのもいいけどな。
あ？　ヤクザがエッグベネディクト食べて悪いか！　生ハム乗っけたのも、スモークサーモン乗っけたのもどっちもうまいだろうが！
いや、今は目の前の朝定食だ。
まずはみそ汁に箸をつけて一口。豆腐にお揚げにネギの具は定番だよな。なめこも好きなんだよな。リクエスト可能ならしてみようか。
そして銀シャリを一口。うん、自分好みの少し硬めの絶妙な炊き加減だ。焼き鮭は思ったとおり、皮がパリパリで身はほどよく脂がのっている。

だし巻き卵はふかふかで、あとからじんわりと出汁が出てくる。横に添えられた大根おろしには醤油をちょんと小さな山形のてっぺんにひとしずく。ここでどばっ！　なんてかける奴はイキじゃない。

二つの小鉢には青菜のゴマ和えにひじきと豆の煮物。さらにその横の小皿には、たくあんに野沢菜漬けと梅干しが綺麗に盛られていた。

――ああ、銀シャリとシャケは鉄板だな。

それにしても、この世界で『日本の朝飯』が食べられるとは！

ここまで完璧な和定食とは、涙がちょちょ切れてくる。

極道の漢たるもの人前では涙を見せないけどな。

さて、丸いテーブル挟んで反対側のクソ聖者を見ると、大口開けてどんぶり三杯飯を食らっていた。

豪快に飯をかっ込むその姿は、昨日の荒神の顔とは別人のようだ。

この世界であっても、聖者だの神だのって肩書きも、飯を食えばただの男だ。

大口を開けて米を平らげている、気持ちのよい食べっぷりを見て、そう思った。

ただし、いい塩梅の塩鮭にだし巻き卵、漬け物にまで醤油をどばっと掛けるのはいただけない。

歳食ったら、高血圧で死ぬぞ。

【4】世界の中心と聖者の背中

朝食のあと、スインが大神殿を案内してくれた。

大神殿を取り囲むように塔が四つあるのだが、やってきたのはそのうちの一つだ。その螺旋階段をえっちらおっちら昇り、てっぺんへたどり着く。

そこから見た絶景に、ジョウは思わず息を呑んだ。

白波が立つ海峡の左右に果ての見えない大地が広がっている。その二つの大地をつなげている細い陸橋に目を移すと、橋のたもとから白い砂岩で出来た大小様々な建物の市街が見える。

街を貫く道を目で辿ると、すべてこの大神殿へと向かっているようだ。様々な物品をうずたかく積んだ荷車や、米粒のような人々が賑やかにその道を行き交っている。

人々の服装は様々だった。砂漠風や南国風など、民族色豊かな衣をまとった人々。

また、ヨーロッパのお貴族様の肖像画で見たような、衿元にも袖口にもレースをふんだんに用いた衣装の男達の姿もあった。

「大神殿は世界の中心ともいわれています」

スインの言葉に、ジョウはうなずく。

まさしく東西の人々が行き交う大交差点だ。

たしかにこの光景を見れば、この神殿が世界の中心だと、人々は思うだろう。

巡礼の群れ、商人、傭兵、使節――誰もがこの白い神殿を目指して動いている。

ジョウはふと、ここで聞いた別の国の名前を思い出した。
「ヒィンモトの国ってのはどこにあるんだ？」
「東の大陸の彼方、砂漠の国々を通り、さらには人さえ住めない死の大砂漠を越えた先にある東の大国シュウ、さらにその先の島国ですね」
そこが東の果てと言われているという。ちなみに西の端にも島国があり、そちらも西の大陸の果てと言われているそうだ。
ちなみに大神殿は大神殿という名で呼ばれ、国ではない。世界の中心であるここは、どこの国にも属さない場所だそうだ。
「じゃあ、味噌とか醤油とかは、はるばる砂漠を越えてやってくるのか？」
「いいえ、大神殿への寄進物は転送によって一瞬で送られてきます」
「ああ、俺をあのケダモノ聖者のところに送った魔法か」
たしかに遠くの荒野へと瞬時に自分は立っていた。人間を送るぐらいだから、物資だって送れるだろう。
スインはジョウが頷くのを見て微笑んだ。
「世界中にある神殿から、この大神殿に向けて莫大な寄進の品が贈られてきます。各地の特産品に珍しい品々。それを加工する職人に取引する商人達が集まり、これだけの都となったのです」
それに加え、一生に一度は大神殿へ参りたいという巡礼者達もまた世界中からやってくるそうだ。
その者達のための宿屋や飲食店、土産物店の存在でもこの都は潤い、賑わっていると。

交易と産業の都でもあり、巡礼・観光のために人々が集まってくる都。
「なるほど、そういう意味でもたしかに世界の中心だな」
人が行き交う白い市街を見おろして、ジョウはうなずいた。
次に案内されたのは創世神話が壁面に描かれた回廊だ。ざっと要約すれば、この世界は荒ぶる鬼神オルテガと慈愛あふれる女神オルテナが創ったという話だ。
そういえば召喚された時に見たキンキラ観音様そっくりの女神の後ろに、真っ赤な炎を背負った仁王みたいな彫像があった。あれがオルテガだったようだ。
スインが言うには、聖者は男神オルテガの、聖女は女神オルテナの化身なんだという。
いや、だから聖女なのに、なんで三十路の男を選んだんだよ！
女神様に膝詰めでそう談判したいところだが、と思っているとスインがその思考を遮るように言った。
「聖者様は、代々同じ魂を持って生まれてくると言われています」
なるほど、いわゆる輪廻転生ってやつか。
見知った概念を言われて、ジョウは壁画に視線を移した。
「じゃあ聖女もそうなのか？」
観音様……じゃねぇ、百合の花を背負った女神オルテナは優美な笑みを浮かべている。
乳白色の大理石に彫られたそれは、ふっくらしたその頬に触れれば温かく感じるのではないかと思わせるほど柔らかく見える。

「いえ、歴代の聖女様はすべて違う魂です」
「そうだろうな」
じゃなきゃ、こんな極道が異世界から召喚されないだろう。
「ただ」
「ただ？」
「聖者様は、歴代の聖女様に初めて会うと必ず『違う……』とつぶやかれたと言います」
聖女じゃないってか？　いや歴代の聖女というから、彼女達はたしかに聖女だったんだろう。
なのに『違う』とはどういうことだ。
さらに謎なのは――と、ジョウは眉根を寄せた。
「俺の時は言わなかったぞ」
「はい、たしかにおジョウ様と」
「だから『お』を付けるんじゃねぇ！」
『違う』よりも酷いじゃねぇか！　しかし、なにが『違う』んだ？
スインと軽口を交わしつつ、ジョウは口元に手を当てた。
恐らくだが、気に入るとか気に入らないとか、相性の話ではない。
だから、なんで野郎の自分なのか？　ってのは分からないが……
「一番肝心の質問を忘れていたな」
ジョウは訊ねた。

「俺は元の世界に戻れるのか？」
「いえ、残念ながら私達は知りません」
女神からの啓示で呼び出す方法は教えられたが、戻す方法は知らないという。
「一方通行かよ」
ジョウは苦笑した。
お家に戻れない！　と子供（ガキ）なら泣くところだ。
しかし、戻れないなら仕方ねぇと、ジョウは腹をくくった。
――かといって、大人しく聖女様をやる気も、まだねぇけどな。
どこでも生きていけると覚悟決めなきゃ、極道なんてやってられねぇ。
そう、この三食昼寝付きの聖女様扱いの大神殿じゃなくたって、たとえ屋根のない野っ原だって。
どこでも……だ。

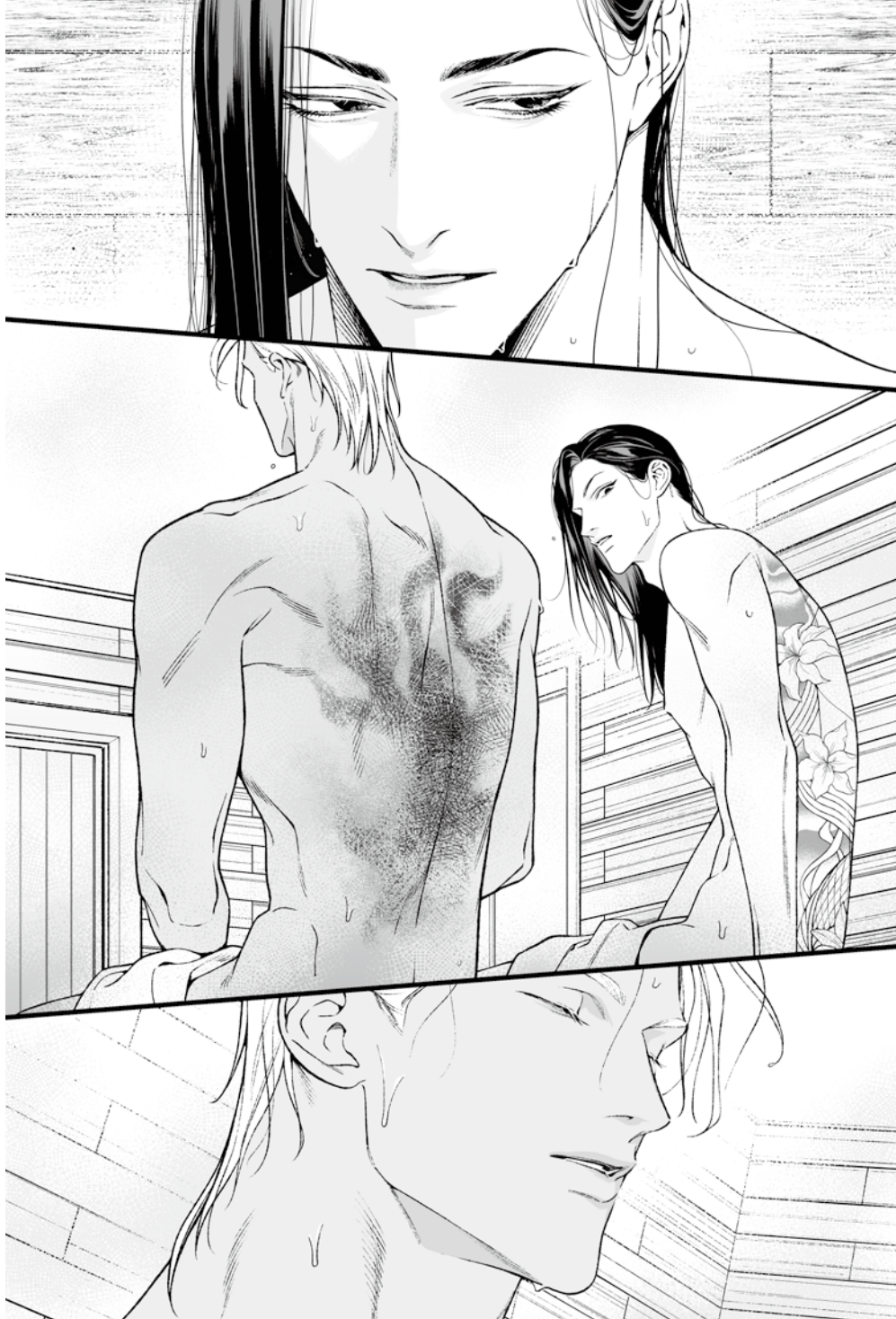
◇◆◇◆◇◆◇◆◇

大神殿の案内が終わり、あてがわれた聖女の私室に戻って寛いでいると、エフィに提案された。
「夕餉の前にハマムはいかがですか？」
「ハマム？」
「はい、広い浴室のことです。こちらのお部屋にも浴室はありますが、ハマムには大きな浴槽に蒸

し風呂もございます」
「サウナもあるのか？　一汗流すか」
この部屋には、聖女個人の浴室があった。猫足のバスタブは優雅だが、やはり広い浴槽に手足をのびのび伸ばして入れるのなら最高だ。それに大好きなサウナ付きとあればだ。
ちなみに風呂は蛇口をひねればすぐに出るお湯に、シャワーも完備していた。見たところ中世ではなく近世ぐらいに文化的に進んでいるとはいえ異世界とは思えない発展ぶりだが、魔法を使ってのカラクリなのだと教えられれば納得する。
ジョウのやってきた現代世界だって、人や物を一瞬で転送する技術は未だない。
魔法なんて、絵空事の物語だと思っていたが、まったく便利なものだ。
で、ハマムだ。
回廊を歩き、ハマムに辿り着く。
エフィが差し出した、レースがぴらぴらで明らかに女物の薄いガウンの湯着は断った。男はタオル一つありゃいいとばかりに、布を腰に巻いて中へ入る。
そこはちょっとした旅館の大浴場ぐらいの大きさがあった。うす灰色の大理石の壁に、鬼神の炎と女神の白百合の文様のモザイクガラスがはめ込まれた天井。そこを通して外の光が入ってくる。薄緑のタイルの床に反射して、綺麗だ。
ざっと湯で身体を流してから、蒸し風呂へと入った。こちらは大理石造りではなく、壁も床も木で覆われていた。そこから漂う森林のような香りが心地よい。

どっかりとベンチに腰掛けて、腕組みをして目を軽く閉じる。
熱気が肺の奥まで満ち、鼓動が一定のリズムで強く打つ。汗がつうっと背骨を伝うたび、身体の淀(よど)みが流れていくようだ。まあ、所詮極道、腹ぁなかの真っ黒さは綺麗にならないし、なっちゃ困るが。
やっぱりサウナはいい。そうしみじみ思ったとたん、ギィと扉が開く音がハマムに響いた。
のそりとクマみたいに入ってきた男を、ぎろりと流し目――もとい切れ長の目で睨む。
「なんで、てめぇが入ってくるんだ？」
「ここは聖者宮だ。私がそのハマムを使って悪いか？」
「……悪くねぇな」
聖者宮は、聖者と聖女が暮らす建物。こいつだって共同の浴場を利用する権利はある。
シグアンはジョウの座るベンチの横へと、どっかりと腰掛けた。
反対側のベンチもあるだろう？　と思ったが、ちらりと見た奴の背中に目を留める。
「それが、聖者の証か？」
彼の背中には、燃えあがる炎をそのまま写したような火傷の痕が広がっている。
聖女の背中に白百合の印があるように、聖者の背中には鬼神が背負う炎がある。
スインにそう聞いてはいた。
だが、背中にあるその『印』はどう見ても、火傷の痕だった。
巨大な焼きごてで押したような、鮮血のような紅い炎が背中いっぱいに広がっている。

それは命に関わるほどの大怪我だったことがうかがえる。
まさか、とでも言いたげなジョウの視線を受けて、シグアンが口を開いた。
「ああ。八歳の時に家が火事になった。家族全員が焼け死んで、俺だけが奇跡的に助かったそうだ」
シグアンの口調はどこかよその出来事のようだった。実際、八歳までの記憶は、家族のことも含めて綺麗さっぱりないと本人は続けた。
「私はその地の神殿の施療院で一週間ほど高熱を出して寝込んだ。目覚めた時には背中の火傷は炎の痕を残したように治癒し、目の色も髪の色も変わっていた」
聖者の印の発現として、シグアンはそのまま大神殿に迎え入れられたという。
「じゃあ、歴代の聖者も背中に火傷を負っていたのか？」
「いや、私ほどに激しい『聖痕』は最初の聖者と私だけだそうだ」
他の聖者にはそもそも背中の大半ではなく、一部に炎のような形の痣が出る程度だったという。
聖者としての力が覚醒すれば、赤みがかった瞳になるのは変わらないそうだ。
さらには初代聖者もまた、白い髪をしていたという。
「私の場合は生死を彷徨(さまよ)うほどの火傷を負った精神の負荷のせいだろうと神殿の医師に言われた」
最初の聖者がどこから現れたのか、彼がどこの生まれなのか、いまだ謎のままだ……とシグアンは語った。
ただ、彼だけが【蝕】と呼ばれる存在を倒す力を持っていたこと。



背中に炎のような火傷の痕を背負い、この世界の人々にはない赤みがかった瞳に、老人のようなまっ白な髪の毛をしていたと。
「それで聖女も黒髪黒目か？」
そんなもの日本人じゃなくても、自分の世界にはごまんといる。
ジョウが聞くと、シグアンは軽く首を横に振った。
「いや、歴代の聖女は背中に白百合の形の痣が浮かびあがるだけだ。西方にしろ東方にしろ、黒髪はいるが、瞳の色はいくら濃くとも青や黄の色だ」
つまり聖者様の赤目と同じように、黒髪黒目はこの世界でジョウ一人ってことか。
だが聖女を呼ぶのに、なんで異世界からヤクザの男を呼んだのか。そこらへんは、女神のオルテナ様とやらに直接会えたならば、やはり膝詰めで談判したいところだ。
――神の気まぐれで人を動かすなんざ、どうにも気に入らない。
こっちはこっちで、死に方も生き方も、自分で決める主義だ。
ジョウは腕組みをして、そんなことを思う。
そこへふと、シグアンの声がした。
「美しいな」
なんのことか一瞬分からなかった。ジョウが横目で見ると、シグアンの視線の先が自分の背に向いている。白百合に囲まれた微笑む観音を見ているようだった。
「そりゃどうも。これは火傷でも痣でもねえ、入れ墨だけどな」

「イレズミ？」
首を傾げるシグアンを見て、この世界にはやはりないのかと思う。ただの刺青を奇跡だと騒ぐ神官どもの最初の反応を見れば、ないのだろうと分かってはいたが。
「肌に墨を入れるんだ。顔料だよ。つまりは人工物だ。これが聖女様の印って間違っていると思わねぇか？」
ジョウはわざとらしくニイッと悪い笑みを浮かべる。
「オマケに俺は男だぜ」
過去、悪女のツラだ、なんて言った奴は全員蹴っ飛ばしてやった。
男だってこんな美人にだったら、騙されてケツの穴の毛まで抜かれてもイイって奴もいますぜ、なんてふざけたこと言った舎弟がいたが、そりゃどんなヘンタイだ！
さて、偽聖女と断じられて、一番に困るのは実のところジョウだ。
何も知らない世界で放り出されるどころか、ペテン師として牢屋に放り込まれる可能性だってある。
しかし、それがどうしたという思いもある。
聖女扱いはいまだ納得していないし、放り出されたところで生まれながらの極道は伊達（だて）ではない。どこでも生き抜く自信はある。
赤みを帯びた薄い唇の両端をつり上げて、横にいる男の顔を見あげる。
百八十はある自分よりガタイも背丈もあるから目線が自然、上になるのがシャクに障る。

シグアンは淡々とジョウに己の出自を語ったあの無表情のまま、じっとこちらを見ていた。
薄くもなく厚くもない、ちょうど良い大きさの男らしい唇が開く。
「美しいな」
「は？」
今度は背中の刺青ではなく、己の顔をまっすぐ見て告げられた。
その低いバリトンにジョウは声をあげた。シグアンはそれにも淡々と答える。
「お前の姿だ。初めて見た時から美しいと思った」
「女顔だって言いてぇのか？」
とたん声にドスが利いて低くなったのは、ガキの頃からのコンプレックスだからだ。
母親譲りの己の顔は断じて嫌いじゃないが、その代わり自分を女と馬鹿にしてきた奴は、すべてぶちのめしてきた。
だったら、女みたいにちゃらちゃら髪を伸ばさずに切れってか？
そんな風に猿みたいにキィキイほざく奴らの神経を逆なでするためにワザと伸ばしているのだ。
さらさらヤマトナデシコよろしくの黒髪をした生白いのに、頭を踏んづけられるのはどんなご気分？　と。
威嚇寸前のジョウを見て、シグアンは頷いた。
「美しいものに男も女も関係はない。私は顔立ちの美しさだけではなく、その黒い瞳に宿る強い意思の光も美しいと言っている。お前の心はまっすぐだな」

「……そりゃどうも」
ジョウは、気が抜けて怒る気が失せた。
顔は綺麗な自覚はある。
しかし、極道にまっすぐだって？
いや、こちとらの性根は捻れまくって螺旋のトルネードコースターかましているぐらいなんだが。
「それにお前は聖女だ。たしかにお前は【荒神】となった私を鎮めたのだからな」
蝕を倒したあとの聖者は、鬼神の力の暴走で【荒神】と呼ばれる状態になる。
聖者のみが蝕を倒せるように、聖女のみがその【荒神】の昂ぶりを鎮めることが出来る。
ジョウはスインにそう教えられた。
「それに私は一目見て、お前が聖女であると分かった」
そういえば歴代の聖者達は、聖女を見て『違う』とつぶやいたと聞いた。俺にはどうして言わなかったのか？
その疑問が一瞬浮かんできて、即座にいきなり『おジョウ』と呼ばれた記憶が蘇った。
一気に怒りと恥辱がこみ上げてきて、あぶくのように浮かんだ疑問はすぐに頭からすっとんだ。
代わりに「はっ！」と馬鹿にするように鼻で笑う。
「聖女だと思ったのは、それが神様の定めたことだからか？　面白くねぇな」
「面白くない？」
「だってそうだろう？　神様のお告げだからって、あんたは聖者やってるのか？　俺も異世界から

突然呼ばれて聖女様だって？　なんでやらなきゃなんないんだ？」
神様が決めた役目なんざ、知ったことか。
己の道は神様が決めるもんじゃねぇ。俺が決めるもんだ。
その先が地獄に繋がってようが、決めたなら最後まで歩ききる――それが極道だ。
神様が言ったからって、己が納得もしてないのに従うなどスジが通らない。
たとえ神の言いつけに従うのが、この異世界で生きて行くための、一番楽な手段だとしてもだ。
神様の代わりじゃないが目の前の男を睨みつける。
そのジョウの目を見て、シグアンがふっと笑った。
それはいつもの仏頂面ではなく、花がほころんだようなひどく人間くさい笑みだった。
「蝕を祓うのは私の意思だ」
「そう思いこまされているんだろう？　ガキの頃から聖者様って呼ばれて、あなたは世界を救う人ですなんて言われ続けて教育されりゃそうなる」
一種の洗脳だよなとジョウは思う。別にこの聖者様の洗脳を親切に解いてやるつもりはない。言いたいことを言ってるだけだ。
しかし、シグアンはその言葉に首を横に振った。
「いや、私にはこの世界を救うつもりなどない」
「は？」
予想外の答えに、ジョウは思わず間抜けな声をあげた。

「ただ蝕を祓っているだけだ。その役目をこの世界に来た時に引き受けた」
この世界に来た……って、それは初代の聖者のことか？
ならば、初代もジョウ同様、異世界人という話にならないか。
じんわりとかいてきた汗をぬぐい、ジョウはシグアンの赤い瞳を見つめた。
「その頃、東西の大陸は繋がっておらず、その真ん中にあるこの大神殿もなかった」
シグアンがいきなり語り始めた。
今も昔も東西の大陸の間を引き裂く海は、波が荒れ狂い、どんな船でも渡れない海域である。そして、その時代、東の大陸の半分を一つにまとめた大王が、自分の西征を拒む海を鎮めよと初代聖者に命じたという。
『聖者よ、お前が神の使いというならば、我が願いを神が聞き入れるように祈れ！』
「聖者は当然断った。私が神々から引き受けたのは蝕を祓うことだけだとな。大王と呼ばれた男は怒り、聖者を地下牢に放り込んだ」
「ひでぇ暴君だな」
ヤクザ同様と言われそうだが、ヤクザはまず相手を言葉で脅して交渉してからの、実力行使だ。よほど紳士的だろう？
「今よりももっと昔、力そのものが支配だった時代だ」
その暴君は、どんな海流も乗り切れる城のような船を創り上げて海を渡ろうとした。そして、巨船の出航に合わせて、捕らえた聖者を処刑せよと命じたという。とんだ進水式だ。

「だが巨船が岸を離れ、聖者の首が落とされようとした時、大きな波が起こり巨船を呑み込んだ。聖者の首に斧を振り下ろそうとしていた処刑人もな」
波が引いたあとには聖者が一人残っていた。遠くで見ていた人々は、大王の天罰ともいえる末路と、聖者が生きているという奇跡にひれ伏したという。
「その時、聖者の立つ海岸から海が割れ、橋のように細く陸地が盛りあがり、東と西の大陸を結んだ。その陸橋を聖者は渡った。東の大陸の蝕はすべて祓った……と、今度は西の大陸の蝕を祓うとな」
その時出来たのが、先ほどジョウがスインとともに塔のてっぺんから見下ろしていた。東と西の大陸を結ぶ細い陸地なのだという。
「……で、その昔話がどうしたんだよ？」
胸の前で腕を組んでジョウは訊ねた。形の良い顎からぽたりと汗が落ちた。
シグアンは、涼しい顔で続ける。
「だから、私は今も昔も世界も人々も救うつもりはなく、蝕を祓うだけだという話だ」
「だから、それはあんたが神様にお告げをされたからだろう？」
「違う、神に命じられたからではない。これは私の願いの対価の取引だったからだ」
「それはなんだよ」
「……分からん。覚えていない」
「なんだそりゃ！」

ジョウは声をあげた。
本人の言動はともかく、世界を救うほどの大仕事と引き替えの願いを覚えてないだと⁉
「あんた聖者様の生まれ変わりなんだろう？　前、前、前世からのことも全部覚えているんじゃないのか？」
「転生をくり返せば記憶も曖昧になるらしい。それもどうでもいいことは鮮烈に覚えていて、肝心なことを忘れるぐらいな」
「ボケ老人か！」
立ち上がって怒鳴ると、ジョウはぐらりとよろめいた。シグアンが立ち上がり支えようとするが、こちらもよろめいて、互いに肩を貸すような形になる。
「長話しすぎたぜ……あっちい……」
「ああ、いささか、のぼせたな」
二人で支え合い、よろめきながら蒸し風呂の扉を肩で開く。
目の前にある水風呂にザバンと飛びこんだ。
頭まで水に浸かれば、白い頭の聖者様も同じように浸かっていた。水面から頭を上げれば、視線がかち合う。
シグアンは言った。
「お前は好きなようにするといい」
「あんた、いきなり話が飛びすぎだ。なにが言いたいんだ？」

聖者様の考えていることは分からねぇとジョウがぼやけば、シグアンがさらに口を開いた。
「聖女の役目をお前が納得してないことは分かっている。したくなければしなければよい」
そう言われてジョウは思わず黙った。
話がポンポン飛ぶ宇宙人のクセに、やけにカンがいい。
「俺が聖女様とやらのお務めをしなきゃ、あんたは困るんじゃないのか？」
「私は蝕を祓うだけのことだ。聖女が居ても居なくてもやることは変わらない」
蝕を祓えば聖者は荒神化して暴走する。それはジョウだって見た。飢えた獣みたいに自分にチューしてきたこいつの相手をしたんだから。
聖女がいなけりゃ困るクセに、ジョウに助けろと懇願もしないのは、意地を張ってるのでもなんでもない。
これは単純にそう思っているのだと分かる。
ただ、淡々と蝕を祓ってきたのか。ずっとずっと昔から。
その長い道と孤独を思うと、少し切ない気分になった。……らしくもない。
水風呂の中で、ジョウはつぶやいた。
「忘れるほど昔に神様とどんなお願いの約束をしたのか、覚えてもいねぇクセに」
「――覚えていなくとも、あの時の願いの強さはこの胸に焼き付いている」
ゴツゴツとした戦う男の手が、厚い胸板の中心でぎゅっと拳を握りしめた。
「どうしても成し遂げなければならないのだ。幾度、転生を重ねようとも、この記憶と魂がすり切

れようともだ。次こそは……と思う」
赤色の瞳がジョウの黒い瞳を見つめ続ける。
その目は、何百年も前の『約束』が焼き付いている瞳だった。たとえ、その約束を覚えてなくとも、たしかに熱はヤツの中にあるのだろう。
世界を救うためではないときっぱりと、こいつは言った。自分はそんな聖人ではないと。
たった一つ、自分の願いを叶えるため、生まれ変わっても立ち上がっている――
「お前が聖女の務めを果たさなくてもよい。だが、私がすべての蝕を祓ったなら、最後に会いに行っていいか？」
「……なんだそりゃ、プロポーズかよ」
水風呂なのになんだか頬が熱くなって、ジョウは額にかかる自分の黒髪をかきあげた。男に言われて、自分が怒りもせずに照れるなんて、本当にらしくもない。
――どうも、こいつだと調子が狂う。
「だが、そういうスジの通った馬鹿は嫌いじゃねぇぜ」
神様への信仰ではない。
ただ自分の覚えてもいない願いの熱を頼りに、ただ独りこいつは歩いてきたのだ。
理屈も利害も関係ない。己がそうせねばならないと思ったことを通す頑固者。
ジョウはひんやりとしてきた自分の身体に触れて、目を伏せる。
『今の奴らは金と欲と色に目がくらんだクズばっかりだ。本物の極道なんていやしない』

立ち読みサンプル
はここまで

そうぼやいていたのは、自分をかばって亡くなった、世話役の幹部だったか。
義理も人情もねぇ……と嘆いていた、そのくせ人望の厚いそのとっつぁんが他の組の鉄砲玉に殺された。
それが切っ掛け。
そこから先は抗争の嵐だった。身動き出来ないしがらみに、ジョウさえもがいていた。
銃をむけたくもない奴の顔にも銃を向けた。
――奴は誰だっけ？　名前どころか顔も思い出せない。
思い出せそうなのに思い出せない。名前ものどちんこから先、もうちょっとで飛び出しそうなのが、なんとももどかしい。
自分もポンコツになったような感覚で、水風呂の中であぐらを掻いてうなっていたら、いまだ赤い瞳が自分を見つめていた。それを見返しているうちに、ジョウの唇から声がこぼれた。
「俺の好きにしていいのか？」
「ああ、お前の好きにしていい」
シグアンにあっさりと言われて、ジョウは頷いた。
そうかと思う。この世界に自分はなんのしがらみもない。
今度こそ自由なのだと。
なにかすうっと肩が軽くなるような気がした。
「ま、いい、しばらく聖女様をしてやるぜ」

この世界のことは分からないし、聖女をやっていれば衣食住の保証はあるのだ。当面の生活の確保は必要だろう。しかし、聖者様を正気に戻す方法が、抱き合ってのベロチュウとはなんとかならないか？　とは思うが。
それでも――背骨に一本、芯が通った奴の隣なら、面白い。悪くもねぇ。

【5】生臭坊主と煙のキス

サウナで二人そろって蒸された翌朝。
聖者宮の朝食用食堂にて、シグアンとジョウは卓を挟んで向かい合っていた。
細目の神官長、スインも同席している。
今日の朝飯は、いつものようにぴかぴかの銀シャリに、ほうれん草とおあげのみそ汁だ。二つの目玉焼きにハムエッグ。半熟具合もほどよく、ジョウの好みはぷるぷるの黄身にちょんと穴を開け、そこへ醤油をひとしずく垂らすのが定番だ。白身はハムの塩気が移ったくらいがちょうどいい。
卓上の醤油差しに手を伸ばせば、シグアンが横のソース瓶を手に取った。
思わず切れ長の目でギラリと見てしまう。
シグアンはむっつりした顔で、ソースをどぼっと目玉焼きにかけた。
――穢される白身ちゃん！